

## 富附特支型研修「学びあいの場」の課題と展望

企画・司会者	柳川公三子（前富山大学人間発達科学部附属特別支援学校、現富山県立富山総合支援学校）
話題提供者	若松 亮太（前広島県立三原特別支援学校、現広島県立呉南特別支援学校） 佐々木良治（広島県立三原特別支援学校） 大西由紀子（富山県立高岡支援学校） 柳川公三子（前富山大学人間発達科学部附属特別支援学校、現富山県立富山総合支援学校）
指定討論者	竹村 哲（富山大学）

KEY WORDS: 主体的な学びの実現 教師の学びの過程を見る力 聴き合う授業研究

### 【企画趣旨】

新学習指導要領では、今後めまぐるしく変化する社会の中で、自ら問題を発見、解決しようとする「生きる力」の育成や、そのための「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められるようになり、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」が重要視されるようになった。そのような授業実践には、教師の「子供を見る力」を培うことが必要であり、授業研究によって効果的に成し遂げられるとされている。

これに適う授業研究として、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校（以下、富附特支）が独自に開発した「富附特支型研修『学びあいの場』」（以下、「学びあいの場」）が挙げられる。「学びあいの場」は、授業中の気になる子供の言動に問いを立て、事実を根拠として、その理由（解釈）を聴きあうことで、教師の子供を見る資質を高める授業研究である。

本シンポジウムでは、二つの学校における「学びあいの場」の応用例を基に、授業研究における子供を見る資質能力の養成の課題と可能性を探る。特に実践例から得られた課題として「子供を見る力」と「授業改善策」の二つの側面をどう融合するかについて意見交換したい。

なお、各話題提供の事例等については、個人情報厳守し、対象者・関係者から公開の了解を得ている。

### 【話題提供者の趣旨】

#### 話題提供 1 「教師の学びの変革」若松亮太、佐々木良治

A 県立 B 特別支援学校では、管理職の理解とサポートを受け 20xx 年度に「学びあいの場」を導入した。月 1 回以上のアンケートにより教職員の声を聴き、その課題を解決するためのアクションを起こし続け、授業研究を推進してきた。成果として、子供の見方の豊かさの向上、教科の本質に沿った聴きあい、協働的な同僚性の構築の 3 点が挙げられた。課題として、子供の見方の豊かさにつながる要因や、授業づくりへの生かされ方についての検証が挙げられた。

今後の「学びあいの場」応用の要件として、鹿毛（2017）のいう我が国の授業研究の問題点を踏まえ 3 点挙げる。まず、日々の授業の延長に授業研究があると捉え、スペシャルな授業を求めないことだ。次に、最上位の目的（「子供の見方」を豊かにする）を追求するために、下位のそれ（指導・支援方法等）を一度傍に置くことだ。そして、費用対効果（時間と成果のバランス）にも目を向けたり、参観体制等の仕組みを整えたりして、授業研究を継続することだ。

#### 話題提供 2 「協働のもとに学び続ける教師集団の構築」

大西由紀子

T 県立 T 支援学校では「一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～」というテーマのもと、学校課題研究に取り組んでいる。その研究の一環として、小学部第 2 学年におい

て、「学びあいの場」の理念を導入した音楽科の授業研究に取り組んだ。2 か月間にわたり放課後に学年所属教員全員（11 名）で「学びあい」（30 分間）を実施し、子供の事実から得られた気づきをもとに授業改善を繰り返していった。同僚がチームとなって子供の学びに目を向け、子供の内面を推察し、その学びに応えるよう授業をデザインすることは、子供の主体的学びを実現するとともに、教師にとっても主体的な学びに向かうことで安心感がもたらされるという結果となった。「子供を見る」ベクトルと「授業デザイン」のベクトルを融合させることは、教科教育という枠を超えて人間教育につながるものであり、教師にとっても日々の教育活動における充足感を満たすものであると考える。

#### 話題提供 3 「『学びあいの場』の応用の要件」柳川公三子

話題提供 1、2 の二つの応用例を基に、今後求められるであろう教師の資質・能力、すなわち「子供の主体的な学び」を具現化する教師の授業デザイン力を培う授業研究の在り方について考察する。「子供を見る力」と、その見取りを根拠とした「授業改善策」の二つの側面を融合し、教師の学びを体系化するための「現・原・対・変シート」を提案する。

### 【指定討論者の趣旨】

竹村 哲

教師にとって子供を見る力は、子供の主体的な学びを培うためには不可欠な能力である。「学びあいの場」のねらいの一つは、子供のためにこの力、つまり子供を見る力をつける点である。ただし、それだけではなく、この研修にはもう一つのより大きなねらいがある。それは、子供の内面を対象として教師自身が主体的な学びを経験的に学ぶことである。このことを失念したなら、学びあいのムーブメントはいずれ形骸化していくことになろう。そうならないために指定討論では、「学びあいの場」のねらいや意義を今一度確認しながら、より望ましくより実行可能な教員研修の在り方について同僚実践者とともに展望できればと思う。

### 【文献】

中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】文部科学省、2016 年 12 月 21 日

鹿毛雅治（2017）授業研究を問う．鹿毛雅治・藤本和久（編），「授業研究」を創る 教師が学びあう学校を実現するために，教育出版，2-24．

竹村哲監修・柳川公三子編集（2019）『特別支援教育のアクティブ・ラーニングー子供の内面を捉え、学びの過程に寄り添う教員研修ー』中央法規出版

（YANAGAWA Kumiko, WAKAMATSU Ryota, SASAKI Ryoji, ONISHI Yukiko, TAKEMURA Akira）